

日本語教育 ICT 学会

2023 研究大会（広島大会）



プログラム

期 日	2023 年 9 月 9 日(土), 10 日(日)
会 場	東広島芸術文化ホール 〒739-0015 広島県東広島市西条栄町 7 番 19 号 Tel: (082)426-5900
主 催	日本語教育 ICT 学会
大会事務局	福山大学 大学教育センター 松本 陵磨 研究室 〒729-0292 福山市学園町 1 番地三蔵 Tel: 084-936-2111 E-mail: ryoma@fukuyama-u.ac.jp
学会事務局	日本語教育 ICT 学会（長野工業高等専門学校 赤瀬 正樹 研究室） 〒381-8550 長野市徳間 716 Tel: 0262-95-7003 E-mail: m_akase@nagano-nct.ac.jp Website : http://ictatlljapan.jp/index.html

ICTATLL JAPAN

Japanese Association of ICT in the Analysis, Teaching and Learning Languages

日本言語教育 ICT 学会2023 研究大会(広島大会)プログラム

研究大会1日目：9月9日(土)

受付開始：13:00（208 研修室 1）※大会参加料 2,500 円

総 会：13:20 ～ 13:50（208 研修室 1）

開会式 会長挨拶 活動報告 会計報告 審議事項 その他

招待講演:14:00 ～ 15:00（208 研修室 1）

「言語（英語）教育学をどうとらえるか—その誕生・発展そして未来—」

小篠 敏明（広島大学名誉教授）

休憩：15:00 ～15:10

研究発表 I 研修室 1 15:10 ～ 16:35

	セッション① 司会： 中野 明（久留米大学）
15:10 ～ 15:35	ミャンマーと日本の英語教科書における語彙の数量的分析 —CEFR-J Wordlist に基づいて— 赤瀬 正樹（長野工業高等専門学校）・渡辺 清美（福山平成大学） 松本 陵磨（福山大学） 【要約】 本研究は、ミャンマーと日本の英語教科書の語彙を CEFR-J Wordlist に基づいて分析する。まず、ミャンマーの ENGLISH TEXT、そして日本の CROWN、NEW HORIZON、SUNSHINE のそれぞれの教科書コーパスから、WordSmith 8.0 (Scott, 2020) を用いて延べ語数、異語数、標準化 TTR を求めた。次に、各教科書の Flesch Reading Ease を CheckRead 3.0 (Ozasa & Fukui, 2015) を使用して英文の難易度を測定した。さらにそれぞれの教科書コーパスを New Word Level Checker (Mizumoto, 2021) を用いて、CEFR-J を基準として語彙分析を行った。各教科書における A1 レベル～B2 レベルの単語を研究対象として、各品詞（名詞、形容詞、副詞、動詞、前置詞）の平均出現頻度数および個々の品詞の出現頻度を明らかにした。データの分析結果と考察については学会当日の発表時に示すこととする。

15:40 ～ 16:05	日本とミャンマーの英語教科書比較（１）－助動詞に焦点を当てて－ 上西 幸治（広島大学）・中野 明（久留米工業高等専門学校） 【要約】 本研究では、日本の３種類の小学校５，６年及び中学校の英語教科書とミャンマーの初等学校の英語教科書における文法項目「助動詞」に焦点を当てて、比較・検討を行い、英語教科書作成及び英語教育推進のために貢献できる内容を模索することを目的としている。比較対象とする日本の小学校・中学校英語教科書は、小学校５年生から中学校３年生までの５年間の英語教科書「New Horizon」「New Crown」「Sun Shine」、そしてミャンマーの場合は Grade 1 から Grade 5 までの英語教科書「English Text」を対象として分析・検討を行った。 その結果、日本とミャンマーの教科書との比較した中で、全体的な頻度数に関しては以下のことが分かった。ミャンマーの英語教科書も日本の３種類の英語教科書においても、頻度数が一番多いのは助動詞 can であり、２番目が will であった。しかも、どちらの国でも、助動詞 can は極めて頻度が高かった。これら２つの助動詞の頻度は、他の助動詞に比べてかなり頻度が高い傾向があった。３番目に頻度数が多かったのは、日本の英語教科書に関しては、New Horizon と Sun Shine では would であったが、New Crown は could であった。一方、ミャンマーの教科書では助動詞 must であった。 これ以降の助動詞の学年別の導入や頻度数の分析及びその考察等の詳細に関しては、研究発表の場で述べる。
16:10 ～ 16:35	A Comparative Study of English Textbooks of Japan and Myanmar: Focusing on Past Tense and Perfect Aspects 張 世霞（拓殖大学）・中野 明（久留米工業高等専門学校） 【要約】 English textbooks for Japanese elementary and junior high school were analyzed with AntConc. Similarly Myanmar English textbooks from Grade 1-5 were also analyzed. Simple past tense and present perfect tense aspects were focused on in this study. We found that Myanmar students study past tense earlier than Japanese students. The present perfect tense was found in Grade two of Japanese textbooks which indicated that the present perfect tense is mainly introduced in Grade 2 syllabus of Japanese junior high school.

閉会及び諸連絡

事務局 赤瀬 正樹(長野工業高等専門学校)

記念撮影(予定):16:50

懇親会:17:15～19:45

案内・司会進行:上西 幸治(広島大学)

研究大会 2 日目: 9 月 10 日(日)

受付: 9:00 (208 研修室 1)

研究発表Ⅱ 研修室1 9:20 ～ 10:45

	セッション② 司会: 塩田 裕明 (久留米大学)
9:20 ～ 9:45	日本とミャンマーの英語教科書における指導法デザインの対照分析 —機能表現に焦点を当てて— 松本 陵磨 (福山大学)・松岡 博信 (安田女子大学) 【要約】 本論文は、日本の小学校・中学校とミャンマーの初等教育の英語教科書における機能表現の取り扱い方に着目し、出現パターンや量的な変化を比較分析した上で、ハリディの言語機能理論との比較検討をするものである。本研究は、機能表現の探求をより効果的にし、結果、英語習得の過程にどのように役立てることができるのかを明らかにしたものである。 本研究の基盤となる機能表現の概念は、ハリデー (Halliday, 1975) が定義したものを用いた上で、テキストデータを自然言語処理技術で分析し有益な情報を抽出するテキストマイニングを用いた分析により、用語の頻度、出現パターン及び言語的特徴を抽出した。さらに、出現する機能表現について、ハリディの言語機能理論における「7つの言語機能」との関連性を分析し検討を行った。 特に、機能表現の多様性の変化、出現の量的な変化を分析し、出現パターンを割り出した上で、ハリディの言語機能理論における 7 つの言語機能のうち、突出する機能やその有効性を分析し検討を行った。なお、分析結果は、学会発表時に述べる。 本研究は、異なる種類の機能表現をバランスよく取り扱い、出現パターンと量的なバランスを工夫することにより、学習者の英語学習効果の向上に貢献できる教科書のデザインについて、その基礎研究となるものである。

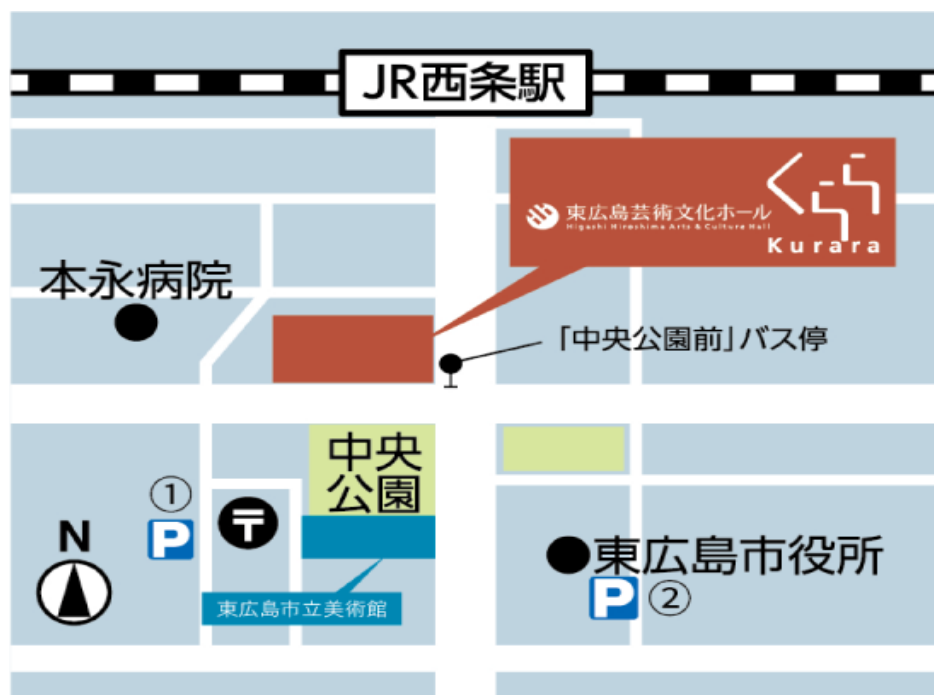
9:50 ～ 10:15	日本とミャンマーの小中英語教科書における過去時制及び完了時制の扱われ方—量的・質的検討— 浅井 智雄（福山平成大学）・本田 良平（福山平成大学） 【要約】 1 研究の背景 本学会では、これまで、アジア諸国と日本の小中学校の英語教科書を語彙や文法項目から比較分析してきた。文法項目の一つとして過去時制や完了時制における比較分析の結果、各国の英語教科書では、日本の教科書よりも、概して早期に色々な表現が導入されていることが確認された。英語教科書はその国の英語教育方針を反映しているものであることから、新たな国と日本の各英語教科書の比較分析を試みることによって、これまでのような傾向または新たな傾向が見出されれば、日本の教科書の構成や教え方に示唆が得られることが期待される。 2 研究目的 ミャンマーと日本の小中学校の英語教科書を、再び過去時制と完了時制の面から比較分析することによって、両教科書におけるこれら2つの文法項目に関する配列パターン及びそのことから推測される日本の教科書における課題を明らかにすることを目的とする。 3 研究方法 ミャンマーの小学校（Grade 1～Grade 5, 5冊）及び日本の小学校 5,6年生（3社、計6冊）・中学校 1～3年（3社、計9冊）を分析対象とした。テキスト化された各教科書の英文を、was, (were), was (were) + ing, 規則動詞の過去形、have (has) + 過去分詞に関して、言語分析ソフト AntConc と WordSmith を用いて数量化したのち、各用法の配列パターンをカテゴリー化して検討した。 4 結果 第1点目に、was・were、規則動詞過去形の頻度数において両国間で格段の差が見出された（例：was・were 総頻度数：ミャンマー93、日本【小学校】22）。第2点目に、ミャンマーでは Grade5 で既に過去進行形の出現が数例見出された。第3点目に、日本では中学校 1 年段階では扱われていない現在完了形がミャンマーでは、Grade5 で出現していた。ただし、「have got + 体調を表す形容詞」であり、限定的であった。総じて、日本の中学校 1 年生までは、今回視点とした過去及び完了時制の用法に関して、かなり頻度数が少なく、配列パターンもあまり多彩ではないようである。
10:20 ～ 10:45	ミャンマーと日本における英語教科書の比較分析 —To 不定詞に焦点を当てて— 保坂 芳男（拓殖大学）・北野 功樹（東京工科大学）

	【要約】 本研究は、英語学習初級者から中級者への移行において、習得が困難であると考えられる to 不定詞に焦点を当てている。日本では 2020 年度から小学校で英語が教科化され、to 不定詞は履修すべき文法項目の中で最も難しいものとなっている。 今回比較対象とするミャンマーの小学校は 5 年制で 1 年次から英語教育が実施されている。そのミャンマーの小学校の英語教科書と、それに対応する日本の英語教科書 5 年分（小 5 ～中 3）を to 不定詞に焦点を当てて比較分析するものである。 1 つの大きな特徴として、日本のような 3 つの主な用法（名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法）を丁寧に教えている様子が見られないということがある。その他の詳細なデータ分析の結果は学会当日の発表の時に示したい。
--	--

閉会行事 10:50 ～11:00 会長挨拶 諸連絡（事務局）

《会場案内・交通案内》（東広島芸術文化ホール HP より）

アクセスマップ URL : <https://kurara-hall.jp/access/>



《懇親会》

会 場：魚民

JR 西条駅より徒歩 3～5 分

日 時：2023 年 9 月 9 日（土）17:15 ～ 19:45（予定）

会 費：5,500 円